※こちらの画像は、オンライン画面からの切り取り画像となります

FUJITSUファミリ会
2020年度秋季大会　講演

ジャーナリスト
池上 彰 氏

Profile

1950年 長野県松本市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。1973年NHK入局。報道局記者を歴任し1994年から「NHK週刊こどもニュース」初代お父さん役を11年間続けたあと、番組降坂と同時に2005年にNHKを退職。在職中から執筆活動を始め、現在は出版、講演会、放送など各メディアにおいてフリーランスの立場で活動する。鋭い取材力に基づいたわかりやすい解説に定評がある。

Withコロナで社会がどう変わり、DXがどう関わるのか？

感染症にまつわるデマに惑わされないために

2020年は新型コロナウイルスに翻弄された一年でしたが、コロナに限らず、未知の感染症が広がった際には、社会にデマが飛び交いがちです。アメリカやイギリスでは「5Gの電波によってコロナ感染が拡大する」とのデマが広がり、5Gの中継所が焼き討ちを受けました。信じられないような話ですが、日本でも明治中期にコレラが流行した際、ちょうど全国に広がりつつあった電話線を通じて感染するとのデマが広がりました。決して他人ごとではないのです。

この種のデマに惑わされないためには、ただ知識を得るだけでなく、それらを有機的につなげる、いわば“知識の運用力”が問われます。例えば、「コロナの感染を防ぐには36度のお湯を飲むと良い」との噂がありましたが、「ウイルスは熱に弱い」という知識に、「人間の平熱は36度4～5分程度」という知識をかけ合わせれば、「そんなはずはない、これはデマだ」と気付けるはずです。こうした知識の運用力こそが“教養”だといえるでしょう。

感染症の拡大を世界史的な観点で捉える

未知の感染症が拡大した時、かつて感染症によって世界がどう変わってきたか、世界史的な観点で見ることが重要です。

例えば14世紀、ヨーロッパでペストが広がり、人口の約3分の1が亡くなりました。人手不足が深刻になったことで、「農奴」と呼ばれ搾取されていた農民の待遇改善が進み、封建社会から資本主義社会へと転換するきっかけとなりました。また、ペストの被害が当時、絶対的な力を持っていたカトリック教会にも及んだことで、その権威が揺らぎ、宗教革命やルネサンスにつながりました。

奈良時代の日本でも天然痘が流行し、労働意欲を高めるためのインセンティブとして、農民が耕した土地の私有を認める「墾田永年私財法」が生まれました。その結果、私有化した農地を奪われないようガードマンを雇うようになり、武士の誕生につながっていきます。

20世紀初頭には、アメリカで始まったスペイン風邪の流行が、第一次世界大戦への参戦によってヨーロッパ全土に拡大。敵味方を問わず感染が広がり、戦闘継続が困難になったことが戦争終結につながりました。さらに戦後、調停役となっていたアメリカのウィルソン大統領も感染したため、フランスがドイツに多額の賠償を要求。その負担で疲弊したドイツでヒトラーが台頭し、第二次世界大戦へとつながります。つまり、スペイン風邪は第一次世界大戦を終わらせると共に、第二次世界大戦の遠因にもなったのです。

Withコロナ時代の社会とは

過去にも何度となく感染症によって世界の歴史が動いたように、現在、コロナによって社会が

大きく変わりつつあります。これからの社会について、「ポストコロナ」「アフターコロナ」という言い方もありますが、最近は「Withコロナ」という言い方が定着してきました。これはコロナウイルスと共存せざるを得ないという現実を表しています。

コロナと共存するためには、治療薬やワクチンの開発が不可欠ですが、かつては開発に10年ほどもかかっていたものが、わずか半年で完成に近づきつつあります。また、ICTの普及によって、こうしたリモートの講演会や、リモートワークを活用して、コロナと共存しながら社会を動かすことができています。その意味では、近年のデジタル社会の進展によって、コロナへの対応が何とか間に合ったといえるでしょう。

その一方で、コロナによって、日本社会におけるICT化の遅れが浮き彫りにされました。例えば、緊急事態宣言が出たあとも、在宅勤務だけでは不十分で、わざわざハンコをもらうために電車で出勤しなければならない人が大勢いました。また、医療現場ではコロナ感染を確認するために、紙の書類を作成して保健所にFAXすることが義務付けられていて、現場の医師が悲鳴を上げて、ようやくオンラインでの報告でOKとなりました。

これらは海外で皮肉交じりに報道されたように、非常に残念であり、恥ずかしいことです。私たちは、「日本はICTで世界のトップレベルをいっている」と思い込んでいましたが、実際はまだまだ遅れていることを自覚すべきでしょう。

Withコロナ社会で問われるDXの進展

それでも、ある程度はデジタル化が進んでいたことで、私もいくつかの大学でリモート授業という形で講義を続けることができました。実際にやってみると、大教室での講義と比べて、学生一人ひとりの反応を見ながら講義ができたり、学生がチャット機能を活用して気軽に質問できるようになったりと、より双方向な授業ができるメリットに気付きました。また、リモート講義を録画してネットに上げる学生が出たり、学生の隣で親御さんが一緒に講義を聞いたりするなど、講義がオープンになったことで、教育内容のレベルアップが進む可能性も出てきました。

こうした変化は教育現場だけではありません。テレビなどのメディア、さらには行政なども含め、幅広い分野でデジタル技術を駆使した業務革新、すなわちデジタルトランスフォーメーション（DX）が進んでいます。

コロナ、そしてDXによって大きく変わろうとする社会の重要なキーワードが「アンコンタクト」すなわち「非接触」です。ビジネスの場でも、「密」にならないよう非接触での仕事がどんどん増えていくでしょう。在宅勤務が広がるに連れて、多くの人が「毎日、出社する必要はないんだ」と気付き始めています。一方で、「出勤することだけが仕事」というような人は居場所がなくなってしまうわけで、評価基準も含めて、組織のあり方も大きく変わっていくはずです。

こうした社会が広がる中で、気がかりなのが「ソーシャルディスタンス」という言葉です。この表現だと、社会的に隔離されるようなイメージがありますが、私たちは社会的な存在であり、決して一人で生きていくことはできません。社会的なつながりは保ちつつ、物理的な距離、つまり「フィジカルディスタンス」を空けることを重視すべきでしょう。

Withコロナの社会では、物理的には離れていても、人間的なつながりを必ず維持できるような技術が、これまで以上に求められます。そのための働き方はどうあるべきか、そのための技術をどう開発していくか、さらには、その技術をどう運用すべきかが問われます。そうした問いに答えることが、DXの役割だといえるでしょう。

Withコロナ社会における創造的休暇

Withコロナの社会で、私たちの生き方、働き方が大きく変わってきますが、これは悪いことばかりではありません。過去にも様々な感染症によって世界が変化してきましたが、実は多くの新しい発見も生まれています。

例えばイギリスでは、ペスト感染が拡大するたびに、多くの人が集まる劇場が閉鎖されました。『ロミオとジュリエット』で知られるシェイクスピアも仕事を失いましたが、その合間を活かして多くの新作を生み出しています。物理学者のニュートンも、大学がペストで休校になったために帰郷した際に、故郷の庭でリンゴの実が落ちるのを見て「万有引力の法則」を発見したといわれています。

このように、本来の仕事ができなくなってしまった際に、新たに生まれた時間を使って、新たなものを生み出すことを、「創造的休暇」と呼んでいます。「2020年のコロナ感染拡大を、人類はDX化によって乗り越え、社会を変えるような新しい価値を生み出した」と未来の歴史書に書かれるために、私たちは何をすべきか、これからの課題として考えていこうではありませんか。